

★校内研だより★

2024.11 文責 ○○

○成果

- ・書くことに向かう姿勢
- ・児童同士の関わる姿
- ・手立ての充実
- ・他教科で学習を生かした活動
- ・学びを表現する場を設定することで、学習のゴールが見えていた

○より良くするために…

- ・一人ひとりを見取り、適切な支援やヒントの提示をする。
- ・今日どこまでできていればいいのか（今日のゴール）を明確に。
- ・書いたものを共有するなど、グループで対話する時間を設けて「関わる」必然性を。

成果として多く挙がっていたのが、子どもたちの書くことに意欲的であったことや、児童同士の関わり合う姿、他教科で学習したことが生かされている、というものだった。社会科や総合的な学習の時間で学んだことをうっしーまつりなどで発表する機会を設けることで、子どもたちが書きたいという意欲を持ち、自分の書き方を友だちに確認するなどの子どもたち同士が関わる姿へとつながる、というプラスの連鎖があったのではないかと思う。また、グループで活動する、先生と一緒に活動するなど学習の仕方を自分で選ぶことで安心感と責任感をもって学習に臨むことができたのではないか、という意見もあった。ICTを活用してテレビにワークシートを映したり、オクリンクで作ったカードを見返せるようにしたりと、活動のための手立ても充実していた。

一方で、多くのグループから「今日のめあて」が示されていないため、何を目的として活動すればよいのかや、どこまで進めばよいのかが明確でない、といった意見が挙がっていた。子どもたちの進度に大きく差ができてしまうと、関わりにくさにつながってしまうという心配もあるため、今日のゴールを設定することで一定の進度を確保すると良いという意見だった。あるいは、場合によっては進度別のグループ分けにする、という手段も取れる。振り返りシートでは子どもたちの見取りについて触れている先生も多く、子どもたちの困り感へ適切な支援やヒントを出していくことで、書く必然性を維持できるようにしていきたい。その他にも、書く活動のため個々の作業に集中してしまうグループもあったので、子ども同士が関わる必要感や必然性をもてるよう、書いたものを共有する時間などを設けると良いのではないかという意見もあった。

☆指導助言者（○○先生）から

- ・子どもたちの主体的な国語の活動が起こるための根っことして、「知りたい」「人に伝えたい」という思いがある。そのための資料として、教科書のモデルをどのように扱っていくか。
- ・子ども同士が関わり合いに必要感があるか。子どもの困り感、課題意識、また学習進度の違いをどのように支援指導していくか。グループの意図や方向性を共有する必要がある。
- ・今日のこの時間に何をするか、という「めあて」の確認。個々に進度が違うなら、「自分にとって」のめあてを確認しておくことよい。
- ・書く力は国語の授業だけでなく、他教科や日常の中で無理なく積み重ねていくことが大事。
- ・教師が子どもの実態を見取った上で、その子の自己目標に対してどう振り返るか。その振り返りを次の時間の目標につなげていく。

今後の授業で生かしていきたいこと（前回）

- ・本時における目指す児童の姿とは？
→単元づくり、単元計画
- ・子どもの実態に応じ、子どもの想いを
大事にした単元づくり

これらなどを意識して取り組んでいけるとよい

今後の授業で生かしていきたいこと（次回）

- ・その時間のめあての確認
→今日どこまでできていればいいのか
- ・子どもの困り感や課題意識へ適切な支援指導を
→子ども一人ひとりの見取りを大事に
- ・グループで関わり合う「必要感」をもてる
→グループの意図や方向性を共有する